

敵基地攻撃能力の危険

1面のつづき

「統合防空ミサイル防衛」(IAMD)の構築は、米統合参謀本部ドクトリン(以下「ドクトリン」)に基づき、米統合参謀本部の戦略能力を新編するため、米軍と同盟国の能力を統合する方針を明確に示している。北大西洋条約機構(NATO)やインド太平洋司令部(INDOPACOM)など、IAMDの構築に協力する国が増えている。

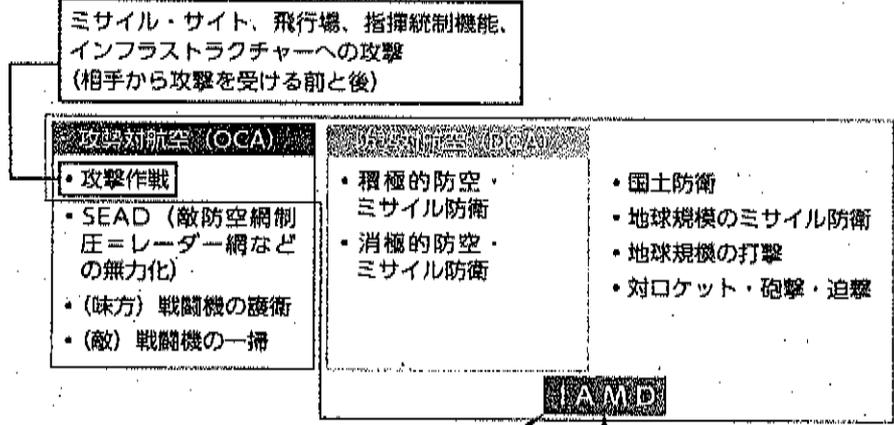
「ドクトリン」は、「敵基地攻撃能力」の重要性を強調し、米軍が「敵基地攻撃能力」を行使する際には、同盟国と協力して行う必要があるとしている。

「ドクトリン」は、「敵基地攻撃能力」の重要性を強調し、米軍が「敵基地攻撃能力」を行使する際には、同盟国と協力して行う必要があるとしている。

統合防空ミサイル防衛

IAMD 切れ目なく

「攻撃」「防御」を一体化した米軍「統合防空ミサイル防衛」(IAMD)の構造



「敵の航空・ミサイル能力から悪影響を及ぼし得る力を無効にすることで米本土と米国の利益を防御し、統合部隊を防御し、行動の自由を可能にするための諸能力と重層的な諸作戦の統合」(IAMDの定義 米統合参謀本部ドクトリンから)

米統合参謀本部 (CS) ドクトリンを基に作成

▽同盟国との協力のあり方 米軍は、その意味を、次のように説明しました。

▽従来の米軍と同盟国との協力は、サイド・バイ・サイド(並走)ではなく、シームレスな融合(シームレスな融合)が重要だ。

▽従来の米軍と同盟国との協力は、サイド・バイ・サイド(並走)ではなく、シームレスな融合(シームレスな融合)が重要だ。

「米軍は、その意味を、次のように説明しました。」

「米軍は、その意味を、次のように説明しました。」

「米軍は、その意味を、次のように説明しました。」

「シームレスな融合」

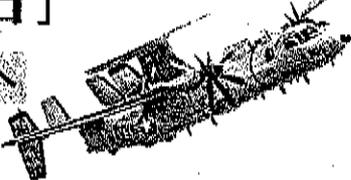
既に進行

「共同交戦能力」搭載 攻撃目標共有へ

敵基地攻撃能力の行使をめぐる日米の「シームレスな融合」は、既に軍事の現場で進行しています。

「統合防空ミサイル防衛」(IAMD)の一角を担う「イーシス・システム搭載艦」2隻の建造費を計上。同盟国には、米軍が導入している「共同交戦能力」(CEC)を搭載する方針です。

CECは複数のイーシス艦や早期警戒機が探知、追跡したミサイルや敵機の情報、艦船や航空機が同時に共有します。共有した情報で撃墜する手法は「エンゲージ・オン・リモート (EOR)」と呼ばれ、米軍が採用しています。最新鋭の「まや」型イーシス艦には既に搭載されており、



INDOPACOM 最新鋭艦「まや」型イーシス艦

今後、追加されるイーシス艦2隻にも搭載するとみられます。航空自衛隊のE2D早期警戒機にもCECが搭載されます。

海自は既にEORの獲得に着手。昨年11月に米ハワイ沖で実施されたミサイル迎撃試

験では、海自のイーシス艦「まや」が探知した情報をCEC経由で同盟国「はぐろ」に提供しました。

米中が武力衝突にいたった場合、あるいはその危険がある場合に、米側からの情報に基づき、海自のイーシス艦や空自の戦闘機が中国軍を攻撃することが可能になることを示しています。当然、その逆すなわち、自衛隊の情報に基づいて米軍が先制攻撃を行うこともありえます。